

広河村異聞

戦前・戦中茨城県教育史

— 祖父母の生き来し道より —

か
の
河野
みち

目次

はじめに..... 4

第一章 祖母..... 7

曾祖母..... 8

飢饉と農村復興策..... 22

登代東京へ..... 35

第二章 祖父..... 45

創設期の師範学校..... 46

国家のための教育..... 49

第三章 要三・登代の結婚生活..... 59

月俸一八円のスタート..... 60

『石下いしげの自由教育』..... 69

行商婦乗りて匂ふや新生姜..... 80

現役将校配属..... 81

第四章 すべては戦争へ..... 85

祖父、校長となる..... 86

父、中学校に進学..... 93

常総地方の民間教育運動..... 106

父、師範学校に進学..... 111

第五章 戦時下の広河村…………… 113

「康雄應召」…………… 114

小学校は国民学校になる…………… 117

「生活綴方教育」事件…………… 119

戦争は終盤へ…………… 139

第六章 敗戦と混乱…………… 155

玉音放送…………… 156

占領軍きたる…………… 164

祖父国民学校長をやめる…………… 169

第七章 親子地蔵尊…………… 183

経済復興へ…………… 184

教育委員民選…………… 187

「親子地蔵尊」建立へ…………… 191

祖父要三死去…………… 195

増田実を訪ねる…………… 203

終章…………… 211

おわりに…………… 217

はじめに

祖父笹井要三が亡くなったのは昭和四五年（一九七〇）一月、私が二三歳のときである。肉親が死ぬということ考えたこともなかった私はかなりのショックを受けた。と同時に取り返しのない悔いを抱えこむことになった。

国民学校長だった祖父は敗戦の翌年（昭和二年）一月、民主教育担当者として適任ではないと退職した。祖母には「学校やめて百姓する」といったという。祖父が自ら退職したことについて、私は祖母から何度となく世迷言を聞かされた。祖父が退職した半年後に生まれ、戦後の「新しい教育」をあたりまえのように受けた世代である私は、祖父がなぜ学校をやめなければならなかったのか理解できなかつた。そもそも戦中・戦前の教育がどういうものであつたか知らなかつたのだ。

祖父が死んだ年の十一月、常総地方の教育同人誌『SAIDE（さいで）』NO・22に要三の追悼特集が組まれた。祖父の教え子や国民学校校長時代の教員等の追悼文を読み、国民学校や戦時中の教育の一端を知ることができた。『SAIDE』発行責任者の増田実は、昭和一六年（一九四一）、生活綴方運動事件に連座し検挙され免職になったが、GHQ指令により教職に復帰した。教員として対照的な道を歩んだ二人は生前顔を合わせたことはなかつた。『SAIDE』を読んでから、祖父や増田実が生きた時代に何があつたのかを知りたいという思いは強くなるばかり。二〇数年前、増田実にお会いして話をうかがった。増田実はその後『鬼畔堂だより』などの冊子を発行するたびに送つてくださった。

郷里に近い水海道（現在の常総市）の開業医で郷土史研究家の富村登は、昭和一〇年に発行した『水海

『道郷土史談』前編の序にこう書いている。

「…宮廷や幕府を中心として描き出された国史は、一般国民からは縁遠いものに思われ、青少年にとつては親しみ易からざる科目である。併しながら歴史は必ずしも京都や、江戸に限られたものではない。人の棲む所其処に史実の見いだされぬ筈はない。…郷土の歴史を知つて、国史ははじめて我に親しきものとなるのであつて、郷土史は実に国史に入るの門といふ事が出来る。父祖の辛苦を知つて我が身の自重すべきを覺ると同じく、郷土史、国史の教ふる所によつて自己もまた史中の人物であることを知るならば、其の向かふ所は自から明かとなるであらう…」

富村登は家の歴史を整理しながら、村、地方史へと興味を広げていった。私も祖父母がどういふ教育を受け、時代をどのように生きてきたのかを知るために、さらに曾祖父母の生きた時代へと郷土の歴史をさかのぼる必要にせまられた。先祖の生きた時代をたどる旅は、新鮮な驚きと発見、示唆に満ちていた。この感動をぜひ若い人たちに知らせたい。

※本文中、敬称を略させていた。なお年令は生年月日がわかつている場合は、満年令で表記。「百姓」など差別語・禁止用語とされる(?)言葉も、時代を表現するために使用した。登場人物の名前と地名はプライバシーへの配慮から、適宜仮名にしたこととおわりしておきたい。